

筑波技術大学卒業生アスリート「スポーツとキャリア発達」

岩淵亜依氏

皆さんこんにちは。私はデフフットサル日本代表の岩淵亜依と申します。こちらの映像はデフフットサルワールドカップの得点シーンをまとめたものです。私は髪が赤いです。

改めまして、皆さんこんにちは。岩淵亜依と申します。実は私、今回パワーポイントを使っただけの講演は初めてなので、タイトルが思いつきませんでした。温かい目で見てくださいると嬉しいです。本日はよろしくお願ひ致します。

▼私▲は、以前トランスコスモスで3年間働かせて頂いたんですけども、現在は、4月からケイアイスター不動産株式会社というところで、障害者アスリート雇用として働かせて頂いております。競技はデフフットサルとデフサッカーを掛け持ちでやらせて頂いております。

私の目標はデフフットサルで世界一を獲ることです。先程流した映像は、11月に行われたデフフットサルワールドカップの映像で、その時は優勝したブラジルに負けてしまって、5位という結果を残したので、4年後まだ続けて▼いましたら▲、その時に世界一を獲るとというのが、現在の目標になりました。

皆さんも目標に向かって励んだことあると思います。昔はゲームを楽しむなど、目標に向かって考えて、実行して、悩んでっていう、この楽しさというのは皆さんも共感して下さると思います。すごく楽しいし、一生懸命になれるし、充実感があると思います。

もちろん好きな事で生活する環境が当たり前だとは思っていません。家族や会社や応援して下さる方々。楽しさだけじゃなくて、いろんな人を通して責任も伴ってきますが、現在日本代表をやらせて頂いて、やっぱり何かに向かって努力するのはすごく楽しいです。

今日は、私の今までのこととお話させて頂きたいと思います。

デフというのは、聞こえない人のことを言います。フットサルが分からない方はいらっしゃるかな？皆さん、分かりますね？大丈夫ですね？良かったです。

ルールは、デフと健聴者のルールの違いで説明させて頂きます。試合中は補聴器を外さなければなりません。審判は笛ではなくフラッグを使用する。この2つだけが違うと思います。

聴者はほとんどのコミュニケーションを声でやり取りすると思います。では、スポーツの試合中の情報というのはどんなものがあると思いますか？フットサルの場合は交代、作戦、プレー中の修正、ポジショニング、マークの確認、アドバイス、敵の位置を知らせる、後ろからの指示などなど、これ以上の情報が飛び交っていると思います。

これだけの情報を聴者は声でやり取りが出来るんですけども、では、遠くにいる人や、向こうを向いている人を、声以外の方法でどうやって呼ぶと思いますか？私は耳が聞こえない。それでこう向いていたら、どうやって呼ぶと思いますか？実際は、その人のところまで駆け寄って、肩を叩いたり、その人の見えるところに入って手を振ったりなどなどしています。なので、交代の時なんかは、ベンチの人はビブスという色が付いたものを着るんですけども、これをこう振り回したりなどして呼んだりしています。そういうところが違うと思うところです。

聴者はどこを向いていても情報が入ってくるので、意思疎通がしやすいんですけども、デフは視野に入っている情報しか入ってこないんですね。このように情報量に差がある中で団体プレーをするっていうのはすごいと思いませんか。先程の映像の中でも、みんなが耳が聞こえない。▼解説▲のウォーっていう声もあったと思うんですけども、試合中はそれも聞こえないんです。

デフフットサルの日本代表も 100%意思疎通出来ているわけではないのですが、そんな難しさの中で全員のイメージが一致して、相手を崩して、得点を取れた時の喜びはもうひとしおです。

これまでのスポーツ歴を、ちょっとお話をさせていただきます。

自分は小学校 4 年生の時にサッカー部に入って、男子に交じってサッカーをやってました。人数が多かったので、朝練では 3 グループに分かれて、1 グループがゲームの時は他の 2 グループがマラソン、これを交代してやっていくという毎日でした。5 年生ぐらいの半ばまでは試合にも出ておらず、5 年生になった時も女の子が入ってこなかったんで、女子 1 人というのと、耳が聞こえない、他はみんな聞こえるという環境の中で、壁を感じてしまって、サッカーを辞めたいと言いついた時もあったんですけども、母に「必要とされる人になれ」と言われて、そのまま練習を続けました。

そのうち 6 年生頭ぐらいから、先輩たちが卒業したのもあって、試合に出れるようになって、技術を磨く楽しさと、必要とされる嬉しさを覚えました。

監督も全部理解はして、指文字は覚えてくれなかったんですけども、自分から監督の口が見えるところ

ろに動けというふうにしつこく言われて、行かなかった時はもうしょうがねえって言って、前に来るまで話し始めないなど、こういったことを厳しく言われました。この経験は中学や高校、そして今でも活かされています。自分から動く大切さというのを学びました。

中学校に入って、男子と女子では体格の差が出てしまうので危ないと言われて、サッカー部はちょっと、というふうに断られました。父が野球をやっていたこともあって、元々興味が有ったソフトボールに転向しました。ここでは同級生が殆ど指文字を覚えてくれて、試合中などは指文字でやっていました。

中学校 3 年生の時には顧問の先生の推薦で、千葉県選抜のソフトボールのチームにも行かせて頂きまして、貴重な体験が出来ました。そのチームでも皆さんが指文字を覚えてくれて、楽しい時間を過ごしました。

中学 3 年生の時に、高校の監督が試合を見に来て下さって、その後、声をかけて頂いて、そのまま高校でもソフトボール部に入りました。なので、中高 6 年間はサッカーはやってなくて、ソフトボールだけやってました。皆さんが殆ど指文字を覚えてくれたので、本当に今思うと人に恵まれたなと思います。そのおかげで、人間●●●などの困ることは無かったので。小学校から一緒に居るから分かるやろ、みたいな雰囲気だったんですけど、いや、分からんから、みたいな。でも、覚えてくれなかったけど、理解はしたので、ゆっくりしゃべったりなどしてくれて、いろいろ困った時には助けてくれる存在でした。

高校の時に言われ続けていたのは、受信というのは聞くことは出来ないけど、自分からしゃべることは出来るでしょって言うふうに 3 年間ずっと言われていました。これはどういうことかと言うと、試合中にシュートをやらせて頂いてたんですけど、後ろの声は聞こえないので、フライが上がった時に、レフトレフトって言うか、自分が行くかをもう全部お前が決めるというふうに言って頂いたりとか、ピッチャーへの声掛けも、言われるのは出来ないけど、ピッチャーのところに行って、大丈夫、大丈夫とか言うことは出来るだろうって言うふうに監督に言われていました。

すみません。ちょっと時間が短いので飛ばしてしまいます。すみません。高校の後の大学に行くまでなんですけど、夏休みまでは就職を希望してて、でも、ソフトボールの監督に筑波技術大学というのがあるよというふうに教えて頂いて、その時は●●●●で毎日部活に行ってたんで、あ、部活休めると思って、オープンキャンパスに行きました。それまでは健聴の世界で育っていたので、ろうのお友達というのは居なかったんですね。始めてデフの世界で手話で●●が出来る。聞こえない人が 100%情報が分かってるという状況を見て、すごく感動しました。

そのまま筑波技術大学に入って、ダンスサークルに入って楽しく踊ってたんですけど、9月頃に4年生の先輩にサッカー部やらないか、フットサルやってみないかということで誘って頂いて、初めて行ったのが東日本選抜選考会というので、そのまま東日本代表になってしまいました。

東日本選抜というのは、年に1回行われる選手権というのがあるんですけども、女子は競技人口が少ないので、東日本と西日本の2チームに分かれて対戦するという大会があるんですよ。その東日本のチームの練習の時に、終わった後、お前は、おめでとうございませう、合格ですって言われて、え？何が？と思ったら、そのまま東日本選抜になってしまったという流れで、そこで大会に出場して、そこからデフサッカー、デフフットサルの人生が始まりました。

その大会にも出場して、その時に偵察に来ていたデフサッカー日本代表の監督に声をかけて頂いて、次に合宿やるから来ないかって言われて、そのまま参加させて頂いて、初めての飛行機だったんで、興奮しながら行きました。

半年後、大学2年生の8月にデフリンピックブルガリアにサッカー日本代表として出場しました。FWだったんですけども、得点ゼロで終わってしまって、不完全燃焼の大会でした。

その後にフットサルと掛け持ちしていた選手に声をかけられて、デフフットサル日本代表合宿にも参加しました。11人でやるサッカーと違って、フットサルは5人でやるんで、ボールがたくさん持てる。それがすごく楽しくて、フットサルを始めることにしました。同じタイミングで健聴チームにも入りました。

その3年後にデフフットサルW杯が行われました。ここで優勝したロシアと戦って、スペインと戦って、1勝1敗で決勝トーナメントに進みます。ベスト4をかけた準々決勝のイタリア戦で、PKで最後のキッカーだったんですけど、外して負けてしまって、すごく悔しい思いをしました。

サッカーより狭いコートで受けた相手のフィジカルコンタクトとか、ゴールやボールを転んででも受ける様子とか、守り、そして観客のこういふ、聞こえないけど動きで分かる熱狂とか、逃したメダルとか、そういう緊張感から、監督が日頃言っていた日本代表として戦うとはどういうことかというのを体感することが出来ました。

その後、トランスコスモスに入社して、デザイナーとして3年間携わらせて頂きました。その時の生活スタイルが、9時から6時まで労働して、その後ジムに行って、帰ってから家のことをやって、寝るのが12時。

練習がある日は夜の9時から11時まで練習があったんで、帰ってから家のことをやって、2時半に寝るという生活をしていて、これはきついと思いました。今はまだ続けられているけど、これからもずっと競技生活を続けるとしたら、身体も壊れるし、技術を磨く時間も無いし、余裕も無いし、目標が達成できないと思いました。そしてモチベーションを保つのも難しいと感じてしまいました。

そこでですね、社会人3年目ぐらいの頃に、チームメイトや男子代表に障害者アスリート雇用で働いている人が増え始めました。実際に話を聞いてみたところ、2つの形があるというふうに聞いて、一つ目が金銭的支援、二つ目が時間的支援。金銭的支援というのは、代表活動にかかるお金を支援する。フットサルサッカーの金銭面での現状は殆どが自己負担となっておりまして、海外に遠征する時の移動費用も自己負担で60万円程使って遠征しているんですね。こういった現状があるので、そういう人達が金銭的な理由で代表を辞退するのはもったいないと思ってくださる企業がこういった支援をしてくださるというのが分かりました。二つ目の時間的支援は、トレーニングや合宿を仕事とみなして、時間的な融通を利かせてくれる。例えば代表合宿は仕事とみなして振休がもらえる。平日は3日間会社に行って仕事して、残り2日間はトレーニングなど、自分の希望に合わせて会社と相談をして、自分がやりたい生活をさせて頂けるような環境を提供してくださる企業さんが今増えてきています。

これをチームメイトに聞いたので、会社にご相談させて頂きました。そのまま転職することも出来たんですけど、まずは自社で、トランスコスモスさんでやって頂けないかというふうに相談させて頂きました。理由が3つありまして、障害者が多い。いろんな障害の方が働いている。それから、その時はもう1人、障害者スポーツで日本代表になっている人がいまして、その人と一緒に仕事していたんですけど、その人と一緒に障害者スポーツの存在を広めたかったというのがあります。三つ目がアスリート雇用を実施してくれる会社の数を増やしたかったというのがありまして、まずはご相談させて頂きました。提案、相談を認められて、制度を設立して頂いたんですけども、自分が求めていた環境とはちょっと違ったもので、悩んだんですけども、世界一を獲るために必要なことと、提案して頂いた制度の内容がちょっと相違がありまして、でも、制度を設立して頂いた恩と自分が目標としていた環境のギャップにすごく悩んだんですが、でも、ずっと考えていたんですけど、フットサルで世界一になりたいというのが一番強い気持ちで、世界一になるためには今の環境では後悔してしまうんじゃないかというふうに思いまして、転職を決めました。

そして今現在の会社に入らせて頂いて、現在は不定期出社という形で働かせて頂いています。ケイアイスター不動産には障害者アスリートチームというものがあって、そこに私は所属させて頂いています。他にも障害者アスリート雇用の方が6人いらっしゃるって、車椅子バスケット、車椅子バドミントン、パラスノボ、車椅子ラグビー、いろんな競技の方、6人の社員と、会社とアスリートチームを繋いで下さる2人の社員

がいらっしゃいます。現在は社内講演や体験会、あとは会社の主催のイベントのゲストで参加させて頂いたり、デフフットボール日本代表選手としてイベントのゲストや体験会させて頂いたりして毎日を送っています。

現在は週に4回、5回ぐらい練習をやって、その合間にトレーニングをやったり、今日みたいな講演があったり、土日は小学生と一緒にボールを蹴ったりなどしています。

競技を続けられている理由は、目標があり、それを目指すことに楽しみや、やりがいを感じる。それから応援して下さる方がいらっしゃる。支援をして下さる方がいらっしゃる。

私にとってスポーツとは、高校まで健聴育ちだったんですけど、人見知りな性格と、どうしても助けてもらっているっていうマインドが働いてしまって、同じ年の子でも対等であるというのがちょっと苦手なところがありましたけれども、ピッチ内では、コートの中では障害は関係なく無意識に対等でいられたというのがあって、私にとってスポーツというのはかけがいのないものになりました。スポーツが無かったら、聴者恐怖症も克服出来なかったと思います。今でもちょっと下になってしまうところはあるんですけども、以前に比べれば、自分から話しかけに行くことが出来るようになりました。

私にとってスポーツというのは、聴者と聴覚障害の差を感じなくしてくれるきっかけをくれるかけがえのないものです。しかも、フットサルでは国の代表として戦える、こんなに嬉しいことはないです。辛いことも、もちろんありますけれども、仲間と一緒に目標を目指すという時間はとても充実しています。フットサルのおかげで今私は人生が楽しいと思えています。

スポーツは何歳になっても自分を成長させてくれるものだと思いますし、これからも成長させてくれるものだと思っています。自分にとってかけがえのないものがあるというのは、とても幸運なことだと思います。この環境に感謝しながら、世界一に向けて引き続き頑張りたいと思います。

至らない発表を最後まで聞いて頂き、ありがとうございました。